

に描出しうることを示唆してくれた症例について報告した。

9. TR の phase analysis

謝花 正信 遠藤 健一 勝部 吉雄
(鳥取大・放)

鳥取大学附属病院で最近 3 年間に行った心プール症例のうち、心エコーにて TR と診断された 8 例と、正常 11 例について、行った心プールスキャンデータを検討した。肝を含む広い ROI を設定して phase analysis を行ったが、phase, anplitude の像からの診断は困難であった。肝に相当する pixel の anplitude の numerical image から、肝の anplitude の平均値の ROI 内最高値に対する割合 (%) を anplitude index として検討した。10% を境界として、sensitivity 77.5%, specificity 90.9% であった。

また、肝に ROI を設定した reflux index 法では、sensitivity 66.7%, specificity 100% であった。Sensitivity の不良は RI angio 法の併用が有用と思われた。

10. RI 心プール法を用いた左室容量の測定

藤井 秀昭 横手 祐司 橋本 正樹
末田 隆 土岡由紀子 松浦 秀夫
梶山 梧朗 (広島大・一内)
山本 和生 山口 敏雄 佐々木正博
(同・放)

^{99m}Tc 赤血球を用いた RI 心プール法より、左室容積の解析を試みた。①心ファントム実験では、既知の容積とカウント数はよく一致した。②各種心疾患 20 例でスワンガンツカテーテル挿入下に RI 心プール法を、そのうち 8 例でシネ撮影をした。心プール法より左室拡張末期カウント (EDC)、左室駆出率 (EF) を、サーモダイリューション法より 1 回拍出量 (SV) を求めた。EDC を静脈血カウントで補正した RVa、投与放射能で補正した RVb は、SV を EF で除した EDV₁ と、おのおの $r=0.811$, $r=0.815$ の高い正相関を得た。③シネ撮影の EDV₂ と RVa, RVb とはおのおの $r=0.838$, $r=0.894$ と高い正相関を得た。本法は非観血的な左室容積の計測に有用であった。

11. SPECT による ^{201}Tl 運動負荷心筋シンチの検討

中田 和明 山本 修三 河原 泰人
(倉敷中央病院・RI セ)
土井 修 光藤 和明 (同・心臓病セ)
重康 牧夫 (同・放)

冠動脈造影を施行した 19 症例 (CAD 11, N 8) に ^{201}Tl 運動負荷心筋シンチを施行し、SPECT 法と Plane 法の CAD 検出率の検討を行った。CAD 全体の検出では SPECT 法は Plane 法と同等、もしくは、それ以上の結果を得た。また、各冠動脈別にみると、右冠動脈において SPECT 法の方が良好な傾向にあり、左前下行枝、回施枝は両者ほぼ同等に良好であった。多枝疾患の診断には、SPECT 法の方が若干良好であった。定量的評価法としては、Circumferential Profile Analysis を行い、視覚的評価と同等の結果を得た。以上より、SPECT 法は 3 次元的に把握できるため、各冠動脈別の病変を検出することができ、多枝疾患の診断に有用である可能性が示唆された。

12. ^{201}Tl 負荷心筋 SPECT の有用性について

宮川 正男 望月 輝一
(愛媛県立今治病院・放)
藤原 康史 土居内純治 西村 一孝
(同・内)
渡部 雅愛 吉田 和弘 (同・小)
村瀬 研也 浜本 研 (愛媛大・放)
新野 正治 (同・小)

^{201}Tl 負荷心筋 SPECT の有用性について、2 症例を呈示して検討した。1 例目は 76 歳狭心症の女性、2 例目は 2 歳 7 か月の川崎病の男児である。それぞれマスターダブル負荷、ジピリダモール負荷後、通常のプラナー像撮影および SPECT データを収集し、2 時間後に再分布のイメージデータを収集した。2 例とも負荷時に虚血部の TI 摂取の低下および再分布像により、病変の範囲を明瞭に描出した。川崎病については、31 症例にて、CAG と負荷心筋 SPECT を行い、両者の所見を比較した。負荷心筋 SPECT は CAG の所見とよく一致し、プラナー像に比し虚血部位の検出率は高く、非常に有用であった。